

## ハイデガーと政治的なもの—有限性の形而上学からピュシスの問いへ

ハイデガー自身の言によれば私たちは政治的なものを語る必要がない。世界のなかに投げ込まれた現存在はその固有の存在の問いのうちにあつて、誕生から死に至る有限性において過去を引き受け未来へと投企することで、あるいは存在の呼び求める促しとしての出来事に応ずることで、すなわちそのつど私のものである先駆的決意性を遂行することで政治の本質に関わるのだから。あらゆる存在者をそのものとして記述することを目指しているハイデガーの存在論は、私たちの事実に政治的体験から出発して、根源的経験に遡行しこの領域に固有な事象の恒存的諸関係を規定するものを見出すように促す。それは所与の正義のプログラムを効果的に遂行するのではなく、私たちの固有の有限な経験から出発して、他者たちとともにある世界の新たな意味を付与する地平として、私たちの思考を政治的なものへと開くのである。このようにして現代の政治哲学は、これまでの公私の区別を超えた領域においても政治的なものを見出している。

ハイデガーの存在論がこうした多様な領域を開くことを可能にするのは、それがアリストテレスの形而上学の構想、存在するかぎりのあらゆる存在者をそのものとして現れさせることを目指しているからである。同時にこの存在論は死へ臨む存在としての現存在の有限性に基礎づけられてもいる。『存在と時間』でハイデガーが *Endlichkeit* の語を用いるのは、死すべき存在としての現存在の規定に限定されているのであって、本来的現存在の企投の挫折という意味での有限性については別の語が用いられている。それは存在の命運 *Geschick* に委ねられ、現存在そのものは不確実性への投企へと開かれている。この *Geschick* がいかに経験されるかは、『存在と時間』では解明されずにとどまった。これを解明するには存在をそのものとして記述することが必要であり、存在とピュシスを重ねる中期思想によって初めてその様相が明らかになり始める。

こうした基礎存在論はその後まもなく変容することは、再びハイデガー自身の言によれば、当初の立脚点の行き詰まりや否定ではまったくなく、伝統的な主観性の形而上学とは別の思索を遂行することで、存在忘却という根本的経験に根ざした次元に到達するためであった。現存在の有限性や被投性に代わって存在そのものをピュシスとして記述する試みが始まるのは 1935 年講義『形而上学入門』である。ハイデガーがヘラクレイトス、パルメニデスの断片から読み解くところによれば、ギリシャ的に解釈された存在とはピュシスである。すなわち、「現れ出ながら滞留しつつ支配すること *Walten*、輝きながら出現するこ

と」(第 38 節)である。このピュシスは人間の作用としての聴き知るロゴスと共属するものであり、言語や主体対象関係に先行する規定であって、対立する事象を抗争においても保持する。原初のこの存在論の構想は、基礎存在論が未規定に残した *Geschick* の成り行きに規定を与える一方で、ソフォクレスの詩行が頭わにするもっとも不気味なものとしての人間の様相によって私たちを困窮に陥れ、存在、無、仮象の三叉路において切迫した決断を迫るのである。ここで登場する存在論的主宰の作用 *Walten* は、狭義の自然のみならず他者一般、およびその間接的介入を含意する言語やイデア性などの構築物をも含む他者性一般、有限な存在者が経験する他者一般としての存在が及ぼす根源的力である。こうした原初のピュシスを聴き知るロゴスがいかに忘却され理性となるに至ったか(ロゴス中心主義)、その生成的側面が忘却され現前するイデアとなるに至ったか(現前性の形而上学)、すべてが眼前にある特別の種類生物すなわち最善の動物に基づいて決定されるに至ったか(存在神論)についても、ハイデガーはさらに説明を続けている。

最後にもう一度ハイデガー自身の言によれば、彼はそのニーチェ講義においてナチズムと対決した。すなわち総駆り立て体制と生物学主義の批判において。戦後においてはとりわけ技術批判として展開されたこうした主張はすでに崩壊した政権についての事後的な論評としてではなく、まさにその政権の迫害を耐え抜きつつ、新たな時代へ向けて練り上げられ公表されてきたことを私たちは忘れてはならない。こうした主張がハイデガーにおける政治的なものとして私たち自身の政治的なものを開くだろう。存在論的主宰としての *Gestell* の猛威に晒された状況においては、もはや存在者的手立てで対応することはかなわず、存在論的対処が必要となる。本稿の最終的考察は政治的なものの独自の存在論として、形而上学と政治的なものの連関を可能にする存在論的主宰 *Walten* の根源性を究明する試みを紹介する。